

Love has just begun.

It will be stronger and never die ...

はじめに愛があった。

IGLグループ理事長 永見憲吾

昨年12月に拙著「【集大成完全版】シルクロードから日本への「聖書の神の指紋」日本人とユダヤ人」を出版いたしました。キリスト教の流れはヨーロッパからアメリカに行き、アジアに伝わったということだけではなく、多くの専門家が、キリスト教はシルクロードを通してアジア、とりわけインド、中国、日本へと伝わっていたことを多数の本に書いておられます。しかし、それぞれが専門的すぎてわかりづらいので、この度、50年をかけてその種の本から学び、全体的にまとめてみました。特に大切なことは宗教・哲学を超えて私共IGLの理念である「隣人愛」が最も大切だと思っております。この本の「はじめに」、「本書を推薦します」、「あとがき」をこの機関紙に書かせていただきます。

【集大成完全版】シルクロードから日本への「聖書の神の指紋」日本人とユダヤ人 永見憲吾 著



はじめに

本書は、人類が始まって以来、思想や宗教がどのように互いに影響し合ってきたか、また日本の宗教や伝統が、いかにシルクロードから伝えられたものに基づいているかを研究したものです。

さらに、こうした過去のことだけでなく、その延長上にある人類の未来は、一体どのようなものになるのでしょうか。私たちは過去と現在をふまえ、未来を見据えつつ、愛と真理に基づく生き方がいかに大切かを学んでいきたいと思っています。

15年ほど前、私は『今日から始める幸せレッスン』という本を出版いたしました。これは、人間の生き方について述べさせていただいたものです。

『今日から始める幸せレッスン』でも少し見たことですが、本書ではまず、「生き方」「愛」についての諸宗教の主張を見ていこうと思います。そののち西洋思想、東洋思想、また日本の宗教、思想、社会現象などが、どう関連しあっているかなどについて、見ていきましょう。

それらは互いに影響しあい、関連しあって存在しているからです。仏教の中に入ったキリスト教思想、日本神道の中に入った古代キリスト教、古代日本へのイスラエル人渡来説、古代東方キリスト教徒の日本への渡来などについても見ていこうと思います。

さらには、聖書の終末思想と終末預言、最後に私たちが生きる道について見たいと思います。じつは私の父は、日本とユダヤ、また聖書との関わりについて、様々な研究をなした人でした。私も父の研究を色々調べているうちに、東洋や日本の宗教がいかに聖書に影響されてきたかを、感じざるを得なくなったのです。

これははなにも私だけのことではありません。今日では、「日本の神道や他力本願仏教などは、歴史的に聖書から深い影響を受けている」と書いている研究者たちも多数出てきています。ただそれらの方々の多くは専門的すぎて、「木を見て森を見ず」の傾向にありがちなこともある、と感じました。

それで私は、それらの著書に学びながらも独自の見方を加えて、シルクロードを経て渡来したそれらの宗教思想等が、その後どのようにして日本の伝統文化になっていったか、その歴史的流れをまとめてみようと思ったのです。

西洋キリスト教的な歴史観に立つのではなく、シルクロードと東洋を通してきたものが、いかに日本の神道となり、また他力本願仏教になっていったかなど、その歴史的な流れを見ながら、私たちの未来と生き方をここに考えてみたいと思います。

2022年11月14日

永見憲吾



著者 永見憲吾

イザヤ書 第46章

いにしえよりこのかたの事をおぼえよ。

わたしは神である、わたしのほかに神はない。

わたしは神である、わたしと等しい者はない。

わたしは終りの事を初めから告げ、

まだなされていない事を昔から告げて言う、

『わたしの計りごとは必ず成り、わが目的をことごとくなし遂げる。』と。

本書を推薦します

「日本民族総福音化の背中を押す貴重な書」

日本民族総福音化運動協議会総裁

日本キリスト教団高砂教会牧師

手束 正昭 氏

私は今、“日本民族総福音化運動”という壮大なビジョンを目指す運動の責任者となっている。…そこから私が得た結論は、日本の古代は紛れもなくキリスト教の大きな影響力の下にあった国であり、神道も仏教もその内実はキリスト教であるということであった。とすると、日本人の圧倒的多数が帰依している神道や仏教からアニミズムやシャーマニズムの要素を取り除き、異教的装いを外してしまうならば、その本質部分にある福音が自ずと浮上してくるということになる。

つまり、日本の歴史、文化、伝統を“悪魔的なもの”として一概に排除するのではなく、その奥に横たわっている“聖書の神の指紋”を発見し、それを大胆に取り出していくならば、日本人は忽ち「キリストの福音」に目覚めていくはずである。

その意味で、永見憲吾氏の研究の貴重な積み重ねとして生れた本書は、“日本民族総福音化”という大風呂敷と思われるビジョンの実現に向けて大きく背中を押してくださっていることを喜び感謝したい。

「まさに日本人に読んでもらいたい本」

聖書と日本フォーラム会長

畠田 秀生 牧師

この書は日本人が教えられてきたもの、社会的、政治的、教育的、また宗教の世界だけでなく歴史上での流れに踏み込んで、まねな書です。その情報の重みを糾す永見氏の聖書を基とした知識と卓見は、読む者の平衡感覚を正してくれます。まさに日本人に読んでもらいたい本です。平易に書かれてあり、日本人が歩んできた道のりに、まさに天からの光を与えるもののごとく私には思えました。

「とても興味深い内容」

広島福音教会 加藤 望 牧師

とても興味深い内容で、次々に頁をめくって読み進めました。特に「日本のルーツ」「日本とイスラエルの伝承」「神道に秘められたキリスト教」「仏教に秘められたキリスト教」(10章～13章)は、うんうんと頷きながら読みました。

日本人とユダヤ人のDNAの類似性、ヤマト王朝を打ち立てた者たちとユダヤ民族との繋がり、古神道に見られるユダヤ教(旧約聖書)の影響や、キリスト教の

あとがき

50年程前、父の残した資料に基づき、どのように整理したらよいかと考え、最初に「終末における聖書の預言」を書くと思いました。その種の書物を探し、今から40年程前に本を出版しようと思いました。

しかし、このテーマだけでは中途半端であり、聖書の歴史から未来に至る預言まで一貫してまとめないと読者にはわかりづらいと思い、さらに研究することに致しました。

その後、宗教と思想の歴史を模索していると、結局、それぞれの宗教・思想は自分の考え方が一番正しいと思い、「正しいと思う者同士」の争いが歴史の中で行われてきたように感じました。

時代劇にある水戸黄門の「勧善懲悪」のように、悪人がおり一方で善人がいてお互いに争い、その最後に水戸黄門が出てきて悪人を裁き善人を助け、ハッピーエンドになるというようにわかりやすいシナリオであれば、皆さん方もよく理解できるでしょう。

しかし、現実の人間関係は違います。正しいと思う者同士の争いですから、その判断はなかなか難しい問題です。聖書の立場からみれば、旧約聖書は国家、社会の倫理を中心としており、新約聖書は個人の自由意思を中心としています。また、旧約は律法を中心としており、新約は“愛”を中心とした聖典です。

ユダヤ教のラビ“ハリサイ人”に対してイエスキリストは、当時もその律法主義を厳しく批判をしていました。

旧約にも新約にもどちらにも記された神の求めるものは、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」また「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」です。にもかかわらず律法主義は人を裁いていく傾向にあります。正しさを追求すれば、人間の弱さゆえ完全に全うすることは出来ません。

逆に“愛”を追求すれば、何をしても“ゆるす”方向に進んでしまいます。新約聖書では、“99匹の羊と1匹の羊”のことが書かれていますが、99匹の羊を残し1匹の迷える羊を探し求める物語です。ところが組織にとっては、1匹の羊が99匹の羊を困らせてしまうということもあります。組織にとってはベンサムの語った「最大多数の最大幸福」は、このバランスを考えるのにひとつの参考となります。

ところで、トマスをはじめとして、イエスキリストの12人の弟子たちは何故命を懸けてイエスがメシヤであることを伝えていったのでしょうか？

トマスは復活のイエスを信じないといい、十字架にかけられた手のクギのあとにトマスの指を入れ、またヤリでつかれたわき腹に指をさして、初めてイエスが復活のキリストであることを認めました。イエスキリストから「見てから信じたのか、見ずして信じる者は辛いなり」と言われたのでした。

トマスをはじめ、12人の弟子達は復活のメシヤを実際に見て、そこから福音を西洋と東洋に伝えていきました。その福音がキリスト教として世界中で一番信じられていること、また聖書がクリスチャンでない人も含め、今日もベストセラー、ロングセラーとして読まれていることは素晴らしいことです。

特にトマスはインドに行って伝道していることで、それが他力本願仏教に伝わっていることは、聖霊の導きでしょう。

一方、ユダヤ教もイスラム教もキリスト教と同じ聖典、旧約聖書を土台にしていますから、彼らもメシヤを待望した歴史があります。旧約聖書には再臨のメシヤと初臨のメシヤの両方の預言がありました。しかしユダヤ教とイスラム教は、未だにメシヤを探し求めて

影響(稲荷神社と八幡神社)、聖徳太子と秦氏の関係等々、日本人のルーツを辿りながら、きっと胸躍らせる方もおられるはずです。神道や仏教の影響下にある日本人に対して、敵対的アプローチをとって宣教してきた戦後の欧米宣教師的方法ではなく、日本人として、神道や仏教にも聖書の神の影響が隠されていることを理解して伝道することがとても大切ですね。

おり、キリスト教の再臨のメシヤを探している状態です。

2000年前に新約聖書は、イエスこそ初臨のメシヤであると宣言しています。その生き方、死に方が、まさに旧約聖書の預言のごとく成就したことが、新約聖書で示されています。

この聖書の流れが、東洋のシルクロードからインド、中国に流れ、終着地の日本に流れてきたことを書かせていただきました。そして、神道と天皇、更に他力本願仏教及び日本の伝承行事、各地の民謡の雛子ことばがヘブル語説等、川守田英二・言語考古学者の「日本ヘブル詩歌」の本も研究に値する書物であると思います。

そして、人類の歴史と終末に関する預言についても書かせていただきました。終末の預言は2600年前の旧約聖書のエゼキエル書に見事に記され、更に2000年前のヨハネの黙示録については、終末の徴候が具体的に記されています。その前兆は、地震、疫病、飢饉、異常気象、偽キリスト、偽預言者、また人々の愛が冷えると言われています。

そして、本書にも書きましたが、北の国の連合軍と南の国の連合軍がイスラエルで戦争が行われることも記しております。

ちょうどこの原稿を書き終えた時、ロシアがウクライナに進行していきました。まさに聖書の預言のごとく、ロシアを中心とした北の連合軍が、次にはイスラエルに進軍していくでしょう。

宇野正美氏によれば、ウクライナのゼレンスキー大統領は、ユダヤ系だそうです。そして現在イスラエルに居住しているユダヤ人の多くはアシュケナジー・ユダヤ人ですが、彼らの多くはもともとウクライナのあたりにいたユダヤ人だったと述べています。彼らは2000年ぶりに祖国に帰り、1948年にイスラエル国家を再建しました。

終末の時には、失われた10支族等、祖国を出ていったユダヤ人がイスラエルに帰ってくるとも預言されています。欧米を中心とした自由主義国家と、ロシア等を中心とした共産主義国家群の争いの中、東洋においては「生ける神の印を持った王達が2億の兵をもってユーフラテス川を渡ってくる」と預言されています。

また、「枯れた骨」が聖書のエゼキエル書37章に書かれているのは、日本ではないかと多くの研究者が書籍等で発表されています。神道や、他力本願仏教が聖書から影響されてきたことを知れば、日本人が目覚め、枯れた骨が生き返ってくるようになるのかと感じます。

最後の章では、人間として生きていくための大切なことを書かせていただきました。言葉がけの重要性和、どんなことがあってもポジティブ・シンキング、そして指示待ち人間にならない「自立」です。さらに、夢を実現するためには必ず目標設定と、具体的な計画が必要です。

特に二十一世紀は、国際社会がより近い中でネットワーク化され、情報交換をしていく必要があります。なぜなら時代はどんどん変化しています。ひょっとして二十一世紀は中国を中心としたアジアの時代となるでしょう。二十世紀に繁栄した日本国は、国際社会で忘れ去られなければならないが、と懸念しています。

過去に栄えたスベイン、ポルトガル、そして十九世紀に栄えたイギリスが、今では普通の国になっている現状を見ると、日本の国も「井の中のかわず」になっている暇がないからです。

ご注文はこちらから

全国の一般書店やキリスト教書店でも一部取り扱っております(注文は可能です)。アマゾン電子書籍(kindle)も同時発売。



<https://www.amazon.co.jp/にて「日本人とユダヤ人」で検索>



<https://www.hikaruland.co.jp/にて「日本人とユダヤ人」で検索>



<https://remnant-p.com/>

